

# 肉用繁殖牛の周年放牧技術

畜産研究部 肉用牛・酪農チーム

周年放牧技術については、九州各県で様々な研究や取り組みがなされており、本県においてもASP（autumn saving of pasture）を利用した冬季放牧やシバ型草地とイタリアンライグラス草地による周年放牧試験に取り組み、様々な技術が確立されてきた。そこで、これまで確立された個々の技術を総合的に組み合わせ、放牧地における周年的な子牛生産を目標とした周年放牧の実証を行い、新たな課題解決に取り組んだ。

## 【普及したい技術のポイント】

- ① 放牧地における簡易畜舎（分娩、哺育）・給水施設等は、廃材等の活用により資材費179,000円程度の経費で建設が可能である。
- ② 分娩間隔の短縮を図る手段として、ヒートマウントディテクターを活用することで、分娩後の早期受胎（最短受胎日数38日）が可能である。
- ③ 分娩した産子を、生後90日齢まで制限哺乳方式による親子放牧を実施することで、県子牛マニュアルと同程度の発育が期待できる。

## 【研究成果の内容・留意点】

1. 放牧地における簡易畜舎（分娩、哺育）・給水施設の設置  
園芸用のパイプハウス並びに枕木等の廃材を活用すると共に、コンテナに止水弁を備えた簡易給水槽を作製することで、資材費179,000円程度で簡易畜舎と給水施設の建設が可能（図1、2）。
2. 発情発見  
発情発見が難しい周年放牧牛であっても、3頭以上を群飼にして、ヒートマウントディテクターを活用することにより、日々（朝夕）の監視だけで容易に発情を発見することが可能。
3. 子牛への制限哺乳と親子放牧  
生後約15日齢までは母子ともに簡易畜舎内で自然哺乳。生後16～30日齢は人工乳、乾草を給与し、夜間のみ母牛による自然哺乳を実施。生後31～90日齢は昼間は簡易畜舎に繋留し、人工乳・乾草を給与、夕方～翌朝まで親子放牧を実施し、生後90日で離乳。この方式で県子牛マニュアルと同程度の発育が期待できる（表1）。

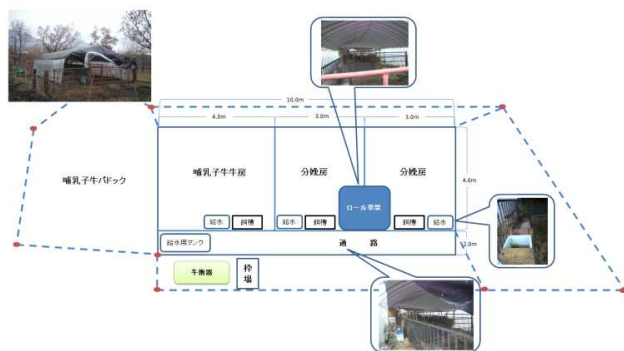


図1 簡易畜舎（分娩、哺育）



図2 高低差を利用した簡易給水設備

性別	生時体重	離乳時(3ヶ月令)	9ヶ月令
雄	+7kg	+24.3kg	+30.3kg
雌	+6kg	+23kg	+33kg

## 留意点

- ・パイプハウス牛舎は、軽量であることから、暴風等に対する対策を別途講ずる必要がある。
- ・草量の不足する時期は、脱牧や有刺鉄線に頭絡が絡みつくななどの事故を未然に防止するため、日々の監視が重要である。